

空



2014・8

SORA 56号

山梨 野畑 さゆり

新茶くむ甲州訛りよどみなく

青梅雨や傷みはげしき古語辞典

郭公や一山越えてまた峠

くづしてもくづれても又蟻の列

ゆつくりと上る踏切り大暑来る

大阪 田岡 千章

葉桜の日の斑を散らし少女像

松の芯父性といふは瘦我慢

更衣髪引詰めて薬剤師

卯の花腐し線刻仏の線細る

菖蒲田に落つ神泉の余り水

新宮 井浦 美佐子

夏来る市場の端に大道芸

つばくらめコンテナ基地の空広し

ふくよかに老いてひとり身実梅売る

追いかけて新じゃが持つて行けと云ふ

検査衣の紐を結べる緑雨かな

熊本 松田 明子

下町に相撲甚句や夏来る

川風をまとふ幟や五月場所

夏場所の町の華やぐ触れ太鼓

回向院に参りし足で五月場所

路地奥へ路地の重なる町薄暑

福岡 山内 碧

休日の子ひとりの田植かな
掃き寄する芥に混じる蝸牛
疑心なき眼をまつ直ぐに青蛙
久々の心もとなき素足かな
喪服着て茅花流しに吹かれゆく

福岡 亀井 紀子

鳥を見て進む船団初鰹
木造の校舎離れぬつばくらめ
さびしくて金魚に戯るる一日かな
口紅を少し濃くして川床涼み
後退りすれど目が合ふ熊ん蜂

福岡 田代 貞枝

辛夷の芽煙のごとき雨過ぎぬ
筆立に耳搔のあり梅雨籠
花カンナ下校うながすアナウンス
博多座の裏木戸通る白緋
山門に「悩みききます」夏椿

福岡 あさなが 捷

羅や魚偏多き御品書
帰省子に敷布の糊を強くせり
後先の見えぬ恋なりあめんぼう
アイリスや自画像耳をおほひけり
ひとりにはとうに慣れたり夕端居

兵庫 戸 栗 末 廣

卯の花や熊野は雲の湧きどころ

柱より梁黒し夏の雨

雲海や山を離るる夜の帷

雲海に朱を点じたる高野かな

閑古鳥今も家井の噴き上り

福岡 栗 原 京 子

あぢさゐのひと月かぎり開く門

噴水の光恋人たち包む

あさがほの繁り尽して開きけり

蜂の巣の始まり一匹の飛行

目を伏せし青春の日の水着かな

東京 山 田 正 子

沙羅の花女流作家の覚悟かな

山桜桃文学少女老いにけり

人見知りの少年草矢放ちけり

蛩草格子戸残る郭跡

旧名の町の提灯宵まつり

長崎 鳳 蛮 華

折つて嗅ぐ男の匂ひ樟若葉

みづうみの遊覧船に燕の巣

薫風や浦を起点に塩の道

濡筋の光る干潟の薄暑かな

船便で届く朝刊小屋顔

東京 古川 夏子

ゆく春や語り半ばで母眠る

遺されし硝子文鎮窓若葉

卯の花や川音耳を放れざる

ぐい呑みの紺深々と江戸切子

小流れに雨のまじりて青すすき

大阪 青木 朋子

くちなしや六十九年間不戦

人のゐて紫陽花園の静かなり

万本の蒼の祈り蓮の花

天に向け泰山木の捧げ咲く

群の蟻みな西方へ急ぎけり

東京 今井 春生

息止めて蜂の縄張抜けゆけり

代田けふ空の深さとなりにけり

紫陽花の大人の色となりにけり

到来の桃一つづつ確かむる

香水を秘めたる筥の手紙束

福岡 吉村 摂護

鍼師待つ夏の黄沙を閉め切つて

神仏住ふ畳の風涼し

大腸を巡るカメラや風薫る

鳴き砂の声を失ひ夏果つる

花芒八十路の坂へ足を掛け

空作品抄
柴田佐知子抽出

母拔吋しこの世は暑きばかりなり

雨の月の笛の音が沁む蟻地獄

百日紅生きるが為に死を思ふ

発光体となりて玉葱夕まぐれ

朝顔の種蒔くころや幼稚園

ばらばらに貰はれて行く子猫かな

雨つばめ朝刊一束波止に着く

遠蛙年とるために今日も食べ

夏掛けの母に勲章付けにけり

高倉和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部早苗

柴田志津子

だいじみどり

野上 杏

小林朱夏

樋口みのぶ



涼風や上がり框の丈やさし
郭公や一山越えてまた峠
松の芯父性といふは瘦我慢
検査衣の紐を結べる緑雨かな
路地奥へ路地の重なる町薄暑
休日の長子ひとりの田植かな
さびしくて金魚に戯るる一日かな
博多座の裏木戸通る白緋
帰省子に敷布の糊を強くせり
閑古鳥今も家井の噴き上り
蜂の巣の始まり一匹の飛行
旧名の町の提灯宵まつり
薫風や浦を起点に塩の道
ゆく春や語り半ばで母眠る
人のゐて紫陽花園の静かなり

矢野百合子
野畑さゆり
田岡千章
井浦美佐子
松田明子
山内碧
亀井紀子
田代貞枝
あさなが捷
戸栗末廣
栗原京子
山田正子
鳳 蛮華
古川夏子
青木朋子

息止めて蜂の縄張抜けゆけり

大腸を巡るカメラや風薫る

田を植ゑて送電線のおそろしき

骨に皮張り付いてゐる蛇の顔

先生も更衣して校門に

日焼子の手伝ひ足手まとひなり

七色の塔あらはれよ虹の上

幼な児の高さに蟬を放ちけり

罌粟ひらくあまたの軍靴過ぎし地に

その中の菌なる我や大銀河

サングラスずらし見上ぐる空の色

青嵐ふくらんで山押し合へり

衣脱いで蛇はしづかにすべりだす

リラ冷えや異郷にあれば異邦人

箒目をあたらしくせり楠若葉

今井春生

吉村撰護

戸栗末廣

天谷翔子

秋千晴

小林朱夏

原友子

吉田菫

白水良子

織田高暢

石川叔子

宮井知英

森俊人

えとう樹里

苑実耶



大袈裟に撃たれてやりぬ水鉄砲
山寺や万緑の尾根雲のなか
夏に入る四方から見ゆる時計塔
ふらここを漕いで涙を払ひけり
日に三度食器洗ひて梅雨深し
巻貝の渦を根元に水中花
ごん狐のおはなしせがむ蚊帳の中
輕鳧の子に擦られつつ苗育つ
短夜の明日の半襟膝りをり
ふくらめる夕日のにじむ半夏生
噴水の頂にあり昼の月
悪童も還暦を過ぎ葱坊主
人逝けば家までさふれ夏の風
お迎へも覚悟の床よ濃紫陽花
地酒飲み追山笠の刻待つてをり

仲里奈央
清水量子
遠山のり子
押田裕見子
酒井みち子
片田きく
上川いつ子
橋本知笑
山口弘子
田邊豊子
林徹也
横田敬子
井上義貞
ふじの茜
森真二

空作品評

柴田佐知子

遠蛙年とるために今日も食べ

小林 朱夏

朝顔の種蒔くころや幼稚園

柴田志津子

朝顔は、夏休みの朝顔観察日記など夏のイメージが強いが秋の季語で、〈朝顔撒く〉は春の季語である。この幼稚園は、作者がよく通る道沿いにあるのだろうか。園児が朝顔の種を撒き、世話をするのであろう。園児たちへのやさしい眼差しと季節の移ろいがさりげなく詠まれている。

ばらばらに貰はれて行く子猫かな だいじみどり

もつれ合つて遊ぶ子猫の姿は見飽きることがかい。その兄弟たちも大体器量よしから一匹一匹と貰われてゆく。それも大方はへばらばらに。異なる環境の中で、これからの人生…猫生が分かれていくのだ。事実をあるがままに詠んでおられるのだが、ちよつと切ない。

まあ驚いた。驚いたが、否応もなく納得。しかし、何度読んでも笑つてしまう。生を淡々と見据えてみると、結構笑えるものが見えてくるということか。しかしへ年とるために今日も食べ〉はやはり可笑しい。且つ真実を突くなかなかの悟りの境地である。食事のたびに思い出しそうな作品。しっかり食べて元気に年取りましようね。

同時発表の〈日焼子の手伝ひ足手まとひなり 小林朱夏〉もいい。何にでも興味を持ち始めた元気な幼子の様子が見えてくる。

涼風や上がり框の丈やさし

矢野百合子

〈上がり框〉この頃あまり聞かなくなった言葉だ。土間や納戸があるころの家には、結構長い上がり框があった。畑からの帰りに寄つた近所の人たちが框に座つてよく雑談をしていたものだ。木造の家の上がり框のやさしい丈は、近在の方々との昔からの親しい結びつきをも感じさせる。〈涼風〉が旧い家構を想像させる。

松の芯父性といふは瘦我慢

田岡 千章

母性は自然に溢れ出る印象がある。さて、父性はと
なると、すこし複雑だ。〈瘦我慢〉とは言いえて妙。
いろいろの場面を想像しても、芯のところに瘦我慢が
あると考えると理解できないでもない。父性の大きな
要素のように思えてくる。何れにしても〈男は辛いよ〉
ということだろう。〈松の芯〉が効いている。

休日の長子ひとりの田植かな

山内 碧

ご長子はお勤めをされているのであろう。週末の休
みには、一人で黙々と〈田植〉をされているのだ。御
両親はもう高齢かもしれない。現代の農業の一面がと
らえられている。

骨に皮張り付いてゐる蛇の顔

天谷 翔子

〈骨に皮張り付ゐる顔〉とは見事な描写である。蛇
嫌いの私は、読んだ瞬間にゾツとした。どんな対象に
も一歩も引かず、その本質に追っていく作者の気迫が
感じられる。クローズアップされた蛇の顔がなかなか
脳裏から消えなくて困った。

幼な児の高さに蟬を放ちけり

吉田 蓓

蟬は捕まえたいが、かといって自分で手にとるのは
まだ怖いという幼子であろうか。しゃがんで子供の眼
の高さから蟬を放ってやったのである。寸景を軽い
タッチで描きとった作品。景が鮮明だ。

ふらここを漕いで涙を払ひけり

押田裕見子

母親に叱られたのだろうか。背景は分からないが、
子供にとつては辛いことがあったのだ。一人で漕ぐぶ
らんこ。子供は子供なりの悲しい時間があったことを
思い出した。

そのほか触れたい作品が多かった。一部をあげる。

田を植ゑて送電線のおそろしき

戸栗 末廣

罌粟ひらくあまたの軍靴過ぎし地に

白水 良子

軽鼻の子に擦られつつ苗育つ

橋本 知笑

サングラスずらし見上ぐる空の色

石川 叔子

青嵐ふくらんで山押し合へり

宮井 知英

リラ冷えや異郷にあれば異邦人

えとう樹里

ふくらめる夕日にじむ半夏生

田邊 豊子

お迎へも覚悟の床よ濃紫陽花

ふじの 茜